

慶應義塾大学

～ 対面授業の活性化を重視した e - ラーニングの実践 ～

慶應義塾大学では、ネットワークによる遠隔講義、講義で提示した資料を直後に Web サイトに掲載する実習支援など、多角的な取り組みが行われている。最近では、討議・討論等の時間を最大限に確保する手段として e - ラーニングを導入し、対面学習を重視した実践的な取り組みを進めている。

1 . e - ラーニングの実施目的 :

- ・ 教員の授業準備を支援するため
- ・ 対面授業での討議・討論時間を最大化するため
- ・ 実習を伴う講義において講義終了後に資料等を即時参照可能とするため

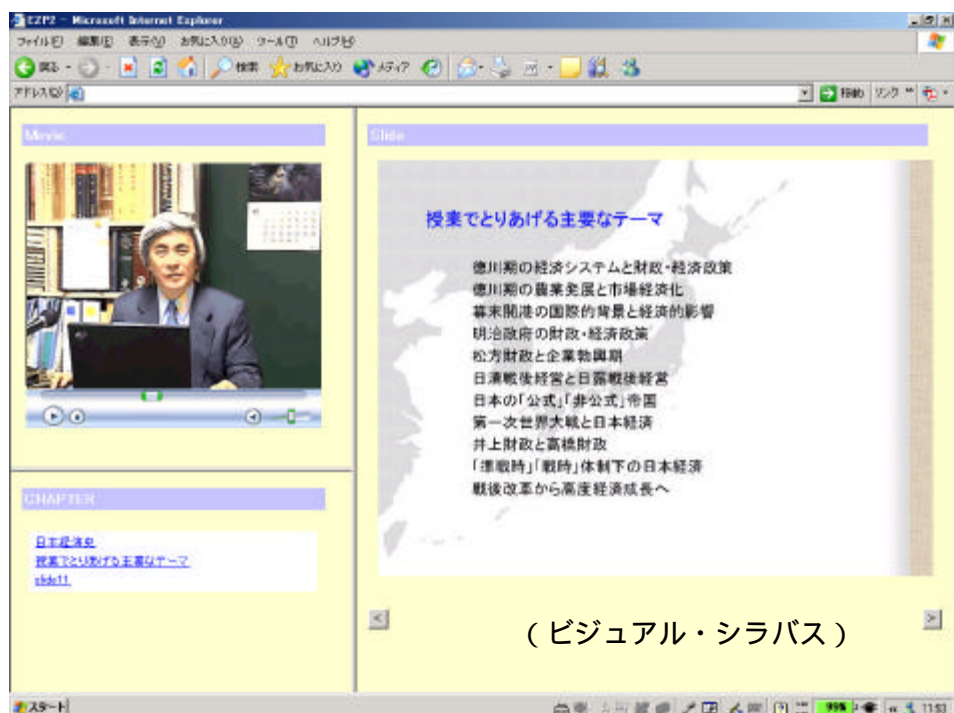
2 . e - ラーニングの実施規模

実施の規模 学部学科単位に実施
 e - ラーニングを活用する科目数 . . . 16 科目
 対象となる学生数 2,184 人

3 . 授業での位置付け

本学での e - ラーニングに対する取り組みは比較的長い歴史を持つ。個々の教員や教員のグループ・レベルによる研究・実験などが継続的に行われている一方で、例えば、2002 年度からは学部・キャンパス単位で一部科目の補講内容を e - ラーニング教材化するなど実証実験レベルの取り組みが実施されるに至っている。

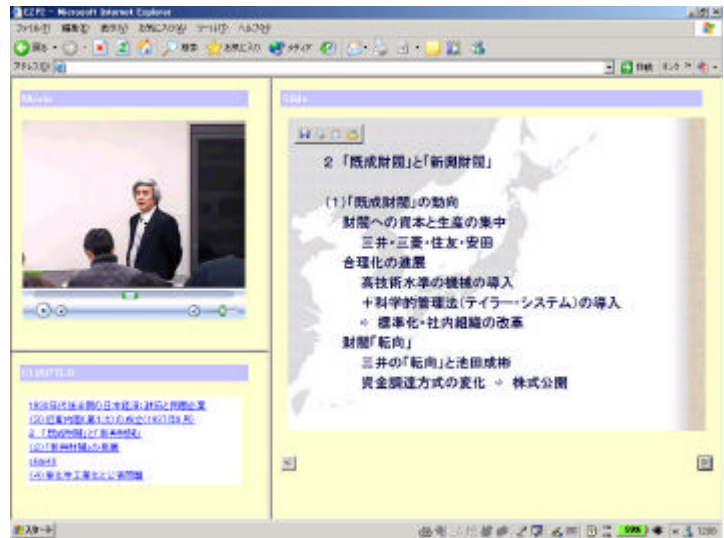
また、文系専門教育科目において授業時間の大部分を討議・討論に利用することに主眼を置いて学習内容の充実を図るため、以前の講義内容を e - ラーニング向けに教材化した上で、事前学習を義務付ける“ブレンDED・ラーニング”の試みも始まりつつある。



4．代表的な授業科目での活用内容

- (1) 科目名 『日本経済史』
- (2) 受講学生数 139人
- (3) 具体的な活用状況

16世紀末から1970年代までの日本経済の変化をマクロ的に概観し、毎回のテーマに沿って、最近の論争も紹介しながら進められる科目である。教室において行われる対面での討議・討論の効果を高めるため、Webを利用したe-ラーニングによる事前学習等を実施している。



5．e-ラーニングの活用により期待している効果

最近の試みにおける学習・教育関連のメリットとして、例えば、実習を伴う講義では、講義の終了後、直ちにWeb配信することによって実習時にWebを参照しながら復習することが可能となり、学習効果が期待されること

e-ラーニングによる事前学習により討議・討論中心の対面授業が充実し、より深い理解が期待されることなどがあげられる。また、活用経験を蓄積することにより、高等教育におけるLOM(Learning Object Metadata)として相応しいデータ定義等に関するガイドラインの策定や、世界標準策定の動きに対する貢献、といった統合的な効果も期待される。



6．大学の支援内容

e-ラーニングの利活用にあたっては、大学として網羅的、多角的かつ重点的な支援が不可欠である。特に、今後の健全な発展のために必須の代表的な項目をあげると以下ようになる。

e-ラーニング教材作成時などに必要となる著作権等に関する事前許諾等、各種権利処理に関する支援
講義収録型素材作成時などにおける教員へのSA(Student Assistant)、TA(Teaching Assistant)あるいはRA(Research Assistant)による支援

高品位素材作成時における撮影等の統合的かつ高度な支援

e-ラーニング関連活動に適した高度情報基盤の整備

7．今後の方針、拡大・改善の計画

学部・学科単位の実施レベルから全学レベルへの拡大を考慮するにあたり、大学教育委員会の下部組織としてe-ラーニングに関連する事項の検討を行う小委員会を設置すると共に、アクションプランの策定、権利関係などに関わる規程等の整備、適用する学問領域などの検討、および情報環境のあり方などに特化して取り扱うワーキンググループを併設している。これらにより、本学としてのe-ラーニングに対するビジョンやビジネス・モデルに適した事業展開が可能となる。

《問い合わせ先》

慶應義塾大学 インフォメーション テクノロジー センター(ITC)本部 事務長 大賀 裕 氏
TEL: 03-5427-1801